音楽教員を志す学生に対する伴奏指導法についての一考察：学校教員の経験を活かした実践的な歌唱指導アプローチ

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大西, 望, Onishi, Nozomi メールアドレス: 所属:
URL	https://senzoku.repo.nii.ac.jp/records/1092

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

教職課程年報　第３号　2018 年度

実践研究報告

音楽教員を志す学生に対する伴奏指導法についての一考察

学校教員の経験を活かした実践的な歌唱指導アプローチ

大　西　　望
Nozomi　Onishi

はじめに

音楽大学の教職課程担当教員には、音楽教員を志す学生に対して、幅広い音楽的な知識や技術を限られた時間内に分かりやすく伝え、習得させることが求められる。本論文では、本学の「教職ピアノ実習」という教科に関する科目を具体例として、ピアノ演奏技術、ピアノ伴奏技術の指導法に加え、伴奏能力と密接にかかわる歌唱指導法について、著者の学校教員の経験を活かした具体的な実践方法を交えて述べることとする。

1　音楽科教育における重要ポイント

中学校学習指導要領（平成 29 年）音楽の第２学年及び第３学年の目標には「（２）曲にふさわしい音楽表現を創意工夫することや，音楽を評価しながらよさや美しさを味わって聴くことができるようにする」とある（中学校学習指導要領　平成 29 年　第二章　第五節　音楽)。音楽表現というものは数学のように答えが決まっているわけではなく、100 人いれば 100 通りの表現が存在し、国や時代によってもまた異なるものであろう。中学校では曲にふさわしい音楽表現を教員が示しつつも、生徒個々人の内に秘められた創意工夫する力を養う必要がある。ここでは、まず自身の過去の小学校・中学校における音楽指導経験を踏まえ、学生が目指す中学校・高等学校の音楽の授業に求められるものについて述べる。

小学校・中学校の音楽の授業を担当していて日々実感したことは、生徒から、決して受動的に授業を受けるのではなく、音楽を表現することによって自己主張したいという本能的な欲求が表出することであった。時にそれは、日頃は理性で抑えられていた感情が生徒から露呈する結果となり、授業運営を継続していくことが困難になる場合もあったが、そのことにより、生徒自らが主体的に行動し、自信を持って音楽表現していくことへ繋がる場合も多かった。

この経験をもとに考察すると、音楽科教育における重要なポイントとは、生き生きとテンポよく授業を進めていき、生徒自身の心を開き、心を育む手助けをしていくことなのではないかと思われる。その

ためには教員自身が音楽を楽しみ、豊かな表現力を身につけるなど、音楽に対する深い洞察や感性を養い、生徒の心に寄り添えるような声かけや、細やかな観察を怠らない気配り、絶妙なタイミングで指示することが大切であろう。

合唱や合奏では他者と協働しながら一つの音楽を完成させていくという団結力も芽生えるため、集団における自分の役割を自覚できる瞬間も多い。音楽は自己表現する個の力と、他者と協働して音楽を仕上げていく集団の力の、相反する二つの要素を同時に学べる科目として重視されるべきである。優れた音楽作品に触れることにより、音楽的な感受性を豊かにし、他者を思いやる気持ちや感動する心など、豊かな情操を養うことを目標として音楽の魅力を伝えていくことが大切である。

本大学における教職ピアノ実習では、以上のような音楽の授業を行うことができる教員を育成することを目標としつつ、歌唱教材におけるピアノ伴奏法等の指導を行っている。次章以降では、その具体的な指導法について述べる。

2　ピアノを演奏するための具体的な技術の習得法

2-1　ピアノを演奏するということ

樹原涼子によれば、ピアノを弾く過程は以下の４つの動作に分解できるという。

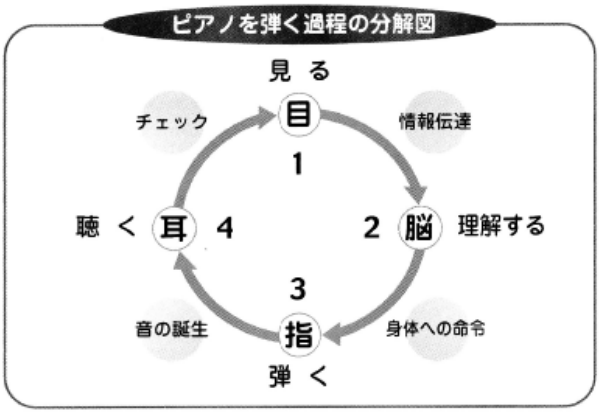


図３　ピアノを弾く過程の分解図（樹原涼子　2002：4）

１．楽譜を目で見る
２．脳がその情報を理解して身体各部に指令を出す
３．指をコントロールしてピアノを弾く
４．イメージ通りの音になっているか耳で確かめつつ、目は次の音符を追いかける

ピアノを演奏するには、この４つの動作を瞬間的かつ連続的に行う必要があるが、いずれかが欠落しバランスが悪いと演奏の質にあらわれてしまう。学生によってできないポイントは様々なので、何が学生の向上を妨げているのかを分析し、的確な指導を行う必要がある。次節より、教職ピアノ実習を受講している学生がつまずきやすい問題点を挙げ、それに対する指導法の例を述べる。

2-2　ピアノを演奏する上でつまずきやすい問題に対する指導法実例

2-2-1　楽譜を読まずに聴き覚えで探り弾きをしてしまう学生

このケースの学生は記憶を頼りに弾いているため、一度演奏が止まってしまったときに即座に弾き直しをしたり、途中からやり直したりすることができない。楽譜を見て弾く習慣を身に付けるために、鍵盤の蓋を閉め手が見えない状態で弾き（写真１：教員がピアノの蓋を支える、鍵盤の両端と蓋の間に支持物を挟むなど工夫して、蓋と手の隙間を十分にとり学生の安全を確保する）、楽譜を見て鍵盤感覚を身に付けられるように取り組むことが大切である。

写真１　鍵盤の蓋を閉めた状態で弾く

2-2-2　つっかえ弾き、弾き直しの癖がついてしまっている学生

腕や手指が、命令に応じて正確に動くだけの筋力と緻密さ（運動神経）を持ち合わせていないために生じているケースが多い。特に、両手 10 本の指を独立させそれぞれ違う動きをすることが困難な学生は、両手で弾くこと自体が非常に大きなストレスとなり、ピアノを弾くことが苦痛になってしまうことがある。このような学生には、いきなり完成された楽譜を弾かせる前に、両手のリズム打ちに取り組んだり、片手で１～２小節ずつゆっくり練習したり、苦手な手を得意な手の倍以上練習したりして、両手の動きがスムーズになるように反復練習を重ねるよう指導する。また、両手で的確に弾けているかどうかを確認するため、片手をピアノの蓋の上で弾き、もう一方の手をピアノの鍵盤で弾かせる（写真 2)。両手で動かしていても聴こえてくる音は片手のみなので、正確に弾けているかどうかを自身の耳で判断することができる。

視野が狭く楽譜を見る場所が遅れているために弾き直しをしてしまう場合は、弾いている箇所の１拍～２拍分先の楽譜を何かの用紙等で隠し（写真 3)、目線はその先を読むという方法が良い。予備動作が身に付くため、用意がスムーズになり、弾き直さずに止まらずに弾けるようになってくる。

写真２　片手ずつピアノの蓋の上とピアノの鍵盤で弾く

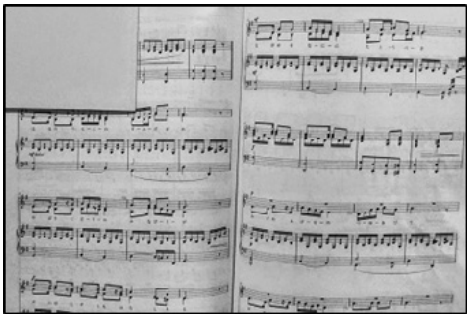


写真３　１～２拍分楽譜を隠す

音楽の授業における伴奏では、弾き直し等により音楽が止まってしまうとそれをベースにしている合唱や合奏も止まってしまうため、伴奏を止めないことが重要なスキルとして挙げられる。これを身に付けるため、スケール課題（図４）を用いて同じ曲を全員で流れに乗って弾き、止まらずに先へ進むことが出来るよう練習を行っている。

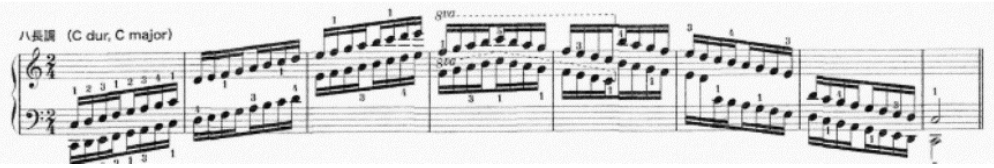


図４　スケール課題（伊藤康英ほか　2017：128）

2-2-3　つぶれた指でバタバタと弾く、又はふにゃふにゃした音で弾く学生

一本一本の指が独立できていないで弾いている場合が多く、特に３、４、５指がくっついてしまう学生が多い。3-4､4-3､4-5､5-4 指のみを動かして独立を促す､指と指の間に指や鉛筆などを挟んで弾かせる（写真４)、指と口を動かす神経は隣同士になっていることから、リズムを口頭で言ってから弾かせるなど、細やかな反復練習が必要とされる。

また､指先に力が入らず､ふにゃふにゃな音で弾いてしまう学生には､指先に負荷をかけるためグリップボールなどを握らせて刺激し（写真５)、重さが伝わるように工夫する。指の付け根がつぶれてしまう学生には、ボールを握らせてその形を崩さないように弾かせる（写真６)、親指が反り繰り返ってしまう学生（写真７）には、鉛筆を親指の内側に入れて支えながら弾かせるなど（写真８)、様々な小道具を用いて指先に力を入れる感覚を身に付けられるように導いていく。

写真４　指の間に鉛筆を挟んで弾く

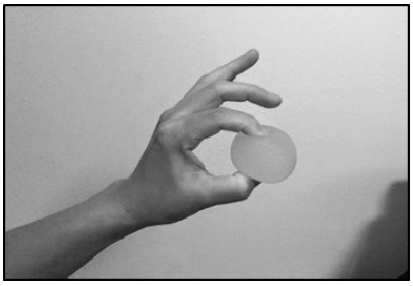


写真５　グリップボールを握る

写真６　ボールを握って弾く

写真７　親指が反り返る

写真８　支えながら弾く

2-2-4　自分の音を聴く余裕がない学生

音符を追ってピアノを弾くことで精一杯になってしまい、聴く力が欠如している学生がしばしば見受けられる。ピアノの音を聴いて弾くことを促すと、とたんに弾けなくなってしまう場合が多いので、最初のうちはストレスがかかるようである。まずは音の余韻を聴き届けられるように、スケール課題のカデンツ（図５）を用いて、和音を長く伸ばし音がどのように減衰していっているのか、音が消えゆくまで聴かせる。呼吸を感じられずに機械的に弾いてしまう学生には、歌いながら弾かせたり、歌ってから弾かせたり、一緒に弾いたりして呼吸を感じさせるように工夫する。鍵盤を叩きつけるような音で弾いてしまう学生には、脱力の方法を教え、リラックスして弾くことの重要性を理解させ、自分も同じようにわざと汚い音で弾いてみせたりして､どんな音で弾いているのかということを確認させるようにする。左右の音のバランスが悪く、メロディよりも伴奏の音の方が上回ってしまう学生は、両手の神経が分かれておらず連動してしまっていることにより、音量差を表現できなくなっている場合が多いので、前述したピアノの蓋の上で右手を、ピアノの鍵盤で左手を弾くことと（写真２)、左手のみの演奏を聴き比べることによって両手の音量差がついていないことを自覚させる。音を聴きながら弾けるようにしていくことは非常に重要なスキルなので、ゆっくりと根気よく寄り添っていく必要がある。

五

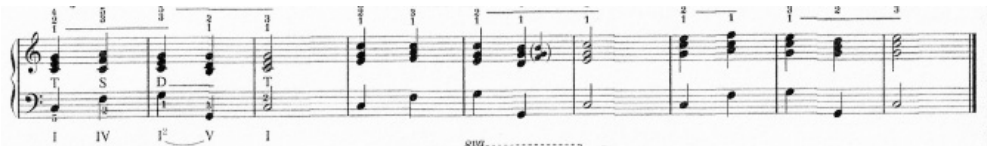


図５　カデンツ（伊藤康英ほか　2017：128）

2-2-5　一定の速さを保持して弾けない学生

一定のテンポをキープして弾けない学生には、メトロノームを用いて練習させる。最初はゆっくり、徐々に少しずつテンポを上げていき、その曲目を演奏する速さまで上げていく練習を積む。拍子感が備わっていない学生には、足で拍子を取りながら身体でリズムを感じさせて弾かせる。それでも急いでしまったり速さが不安定になってしまったりする学生に対しては、録音や録画を行い、客観的に自分の演奏を聴いたり見たりする機会を作る。速くなってしまう部分だけを録音再生して微調整を試み、心地良い的確な速さで弾けるようになるまで繰り返して、染み込ませていく。

指が独立していないために、細やかなパッセージを正確に弾くことができず転んでしまう学生には、リズム練習を勧めている。符点、逆符点、16 分音符の符点、スタッカートなどで練習し、符点リズムの長い音符はより長く待ち、短い音符はより短く弾くことで指先の神経を育ませていく。最後にスタッカートでミスをしないように弾かせて精度を上げていく。

この章では、ピアノを演奏するための具体的な技術の習得法を、学生の問題点を改善するという形で述べてきた。教職ピアノ実習の 90 分の授業時間内で、4 ～ 5 名の学生に対しこれらの問題点を見つけ改善していくことは、時間が足りず困難が伴う場合が多い。その対策として、教員がレッスンノートを用いて毎回の授業の重要ポイントや復習ポイントを記入し、それに基づいて学生に練習目標を設定させ日々の練習記録を記入させるなど努力を見える形にし、授業時間外にピアノの練習をする習慣を身に付けさせることで、学生が着実に力をつけられるような工夫を行っている。

3　ピアノ伴奏技術を向上するための指導

前章で述べたピアノを演奏する技術を向上させることと並行して、歌唱教材を用いてピアノの伴奏技術を向上させるための指導を行っている。ピアノの演奏技術を向上させることが第一の目標ではあるが、伴奏にはそれとは違うスキルも求められる。教職ピアノ実習で用いているテキストには、活用と練習における留意点として、「自ら歌って伴奏」「テンポの掲示とキープ」「止まらずに弾き通す」「ハーモニーの意識とペダル」「アンサンブル」が挙げられている。この章ではこの５つのキーワードに沿って伴奏力を向上させるための方法を述べる。

3-1　自ら歌って伴奏する力を育む

伴奏しながら歌うということは、演奏者の混乱を招く場合が多い。しかし、実際の音楽の授業におい

て弾き歌いのスキルを身に付けていることは大切で、弾きながら歌うことができないと適切な指導を行うことも難しくなる。いきなり両手で演奏するのではなく、片手ずつメロディ（右手）と歌、伴奏（左手）と歌というように、分解して丁寧に弾けるように反復練習を続けていく。この方法がスムーズにできるようになったあとに両手と歌という組み合わせで弾くと、自分の音を客観的に聴けるようになってくる。

しばしば、声が小さすぎて伴奏とのバランスが悪くなってしまう学生がいるので、伴奏の音は指を立てずに寝かせて弾いたり、歌の練習をしたりして、座ったままでも腹筋を使って良い声で歌えるように指導してから、伴奏とのバランスを聴きながら練習していく。

3-2　テンポの提示とキープ

テンポについては、前章の「2-2-5. 一定の速さを保持して弾けない学生」で述べたが、そこで述べていない伴奏という面から注目すると、やはり歌と一体感を持って弾けているかどうかが大切になってくる。呼吸を感じられずに弾いている学生が何と多いことか。他の学生の歌声に合わせて伴奏を弾かせてみると、呼吸を感じられない学生はテンポが不安定で大変歌いにくい状況となってしまっている。それを改善するためには弾き歌いが効果的である。心で思っているだけではダメで、やはり実際に声を出してみると自分が音楽的に弾けていなかったことを自覚するようである。伴奏が歌を追い越してしまう場合には、この方法が効果的である。

もう一つの方法は、細かい音符を数えながら弾くということである。例えば、16 分音符の音型が楽曲の中で取り入れられている場合、2 分音符を弾いている時にも心の中では 16 分音符を刻み、テンポが不安定にならないように心掛けることである。同様に、休符を感じる時にも細かい音符で数えるようにすると、音楽の流れが不安定になりにくい。

3-3　止まらずに弾き通す

伴奏を行う上で最も重要なテクニックである。しかしこれは、几帳面な人ほど苦手とすることかも知れない。正確に弾くことにこだわってしまって、音楽の流れが止まってしまうほど弾き直しをしてしまう学生がいるが、伴奏が止まってしまうと合唱や合奏もそれに引きずられて止まってしまうため、何より流れを止めないことが大切で、多少ミスをしても先へ進み続ける強い意志が必要である。これを身に付けるには誰かと一緒に弾くことが効果的である。教職ピアノ実習では、スケールを全員で弾いたり歌唱教材を全員で弾いたりすることもある。常に音楽が流れている状態を保てるので、たとえミスをしてしまったとしても途中から弾かなければならず、途中から流れに乗って弾く練習にもなる。また、『2-2-2. つっかえ弾き、弾き直しの癖がついてしまっている学生』で述べたように、楽譜を見る場所が遅れているために弾き直しをしてしまうケースも考えられる。

3-4　ハーモニーの意識とペダル

いくら音符を正確に弾けていても、ハーモニーを感じる感覚が養われていないと、いびつな響きになってしまい、違う楽曲のように聴こえてしまうこともしばしばである。また、ペダリングを苦手とする学生や、音の濁りに敏感になれない学生も多い。

ハーモニーを感じさせるためには、スケール課題のカデンツ（図5）を用いることが多い。左手バスを豊かに響かせ、右手上声部の和音をどう弾いたらその和声らしく聴こえるのか、一音一音ゆっくり弾いて、響きを確かめながら音が消えるまで聴く。基本形の和音の場合、根音は深く、第３音は軽く、第５音は高らかに響くように弾くとバランスが整う。また、次の音へ移行する時に、前の音からどの程度音程が広がっているのか、もしくは同音のままなのか、逆に狭まっているのか、音と音の距離感を感じながら弾くと、滑らかに繋がっていく。

ペダリングを教えることは本当に難しい。耳で聴きながら感覚的に踏みかえることが多いからだ。ダンパーペダルをどの程度踏むのか、踏み込む深さを４段階位に踏み分けて音を出すと、その音の響きの違いを感じ取ることができる。個々の楽曲においてどのようなペダリングがふさわしいのか、タイミングと深さに分けて細かく指示し､和声が濁ってしまうことのないよう細心の注意を払って指導している。

3-5　アンサンブル

優れた伴奏であるかどうかで、楽曲のイメージやクオリティは決まってしまう。そこで、表現力を磨き、音楽の素晴らしさや奥深さを感じさせられるような演奏ができるよう、以下の点に留意しながら演奏するように指導している。

伴奏において最も心がけて欲しいことは､歌声とピアノのアンサンブルを感じながら弾くことである。前奏部分では、その楽曲がどのような曲なのか、歌い手や聴衆に予感させられるようなイマジネーション豊かな演奏をする。歌が始まってからは、そのバランスを考えながら和声を担い、歌いやすいようにタイミングを計る気配りも必要である。間奏部分はピアノ・ソロとなるため、歌のエネルギーを受けて主役になったつもりで演奏をする。ブレスやスラーにも配慮すべきである。後奏は楽曲の締めくくりを担う役割として、最後まで気を抜かずに演奏する。

以上、伴奏における重要なポイントを５つのキーワードに沿って述べた。ピアノ・ソロとは異なり、伴奏は一人では完結できず必ず相手の存在があって成り立つものである。自分の演奏に必死になってしまうのではなく、相手が何を望んでいるのか、どうしたら相手が歌いやすいのかということをいつも考えながら、寄り添っていく姿勢が大切である。時にはピアノがリードし、時には影となり支え、相手と調和していくこと、決して独りよがりの演奏になってしまわないように指導する必要がある。

八　4　実践的な歌唱指導法

4-1　音楽の授業における「歌唱」の目標内容について

中学校学習指導要領の音楽「A 表現」のうちの「歌唱」の目標内容は次の通りである。

ア　歌唱表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら，曲にふさわしい歌唱表現を創意工夫すること。

イ　次の（ア）及び（イ）について理解すること。

（ア）曲想と音楽の構造や歌詞の内容及び曲の背景との関わり

（イ）声の音色や響き及び言葉の特性と曲種に応じた発声との関わり

ウ　次の（ア）及び（イ）の技能を身に付けること。

（ア）創意工夫を生かした表現で歌うために必要な発声，言葉の発音，身体の使い方などの技能

（イ）創意工夫を生かし，全体の響きや各声部の声などを聴きながら他者と合わせて歌う技能

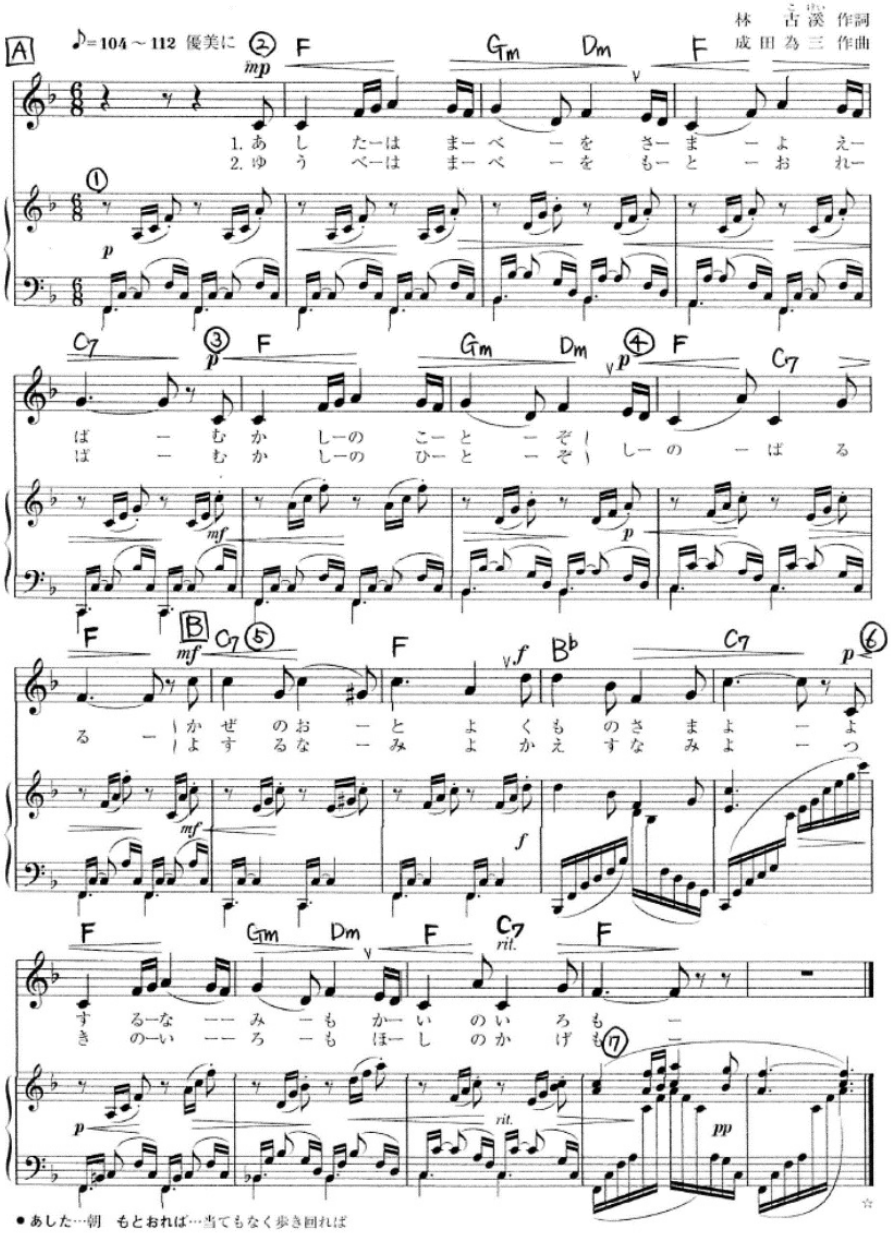
（中学校学習指導要領　平成 29 年　第二章　第五節　音楽）

多感で思考の柔軟な世代である中学生に対するキーワードは創意工夫である。事項イにある曲や発声、音色に対する理解を深めると、その曲を自分なりにどう表現すべきか、したいのかという想像力を膨らませることにつながる。事項ウには、その活動によって創出されたイメージを表現するためには、基本的な技能を習得する必要があるということが示唆されており、これら事項イとウの達成が事項アにつながると読み解くことができる。

4-2　歌唱指導法の実例

ここでは、実際の歌唱教材を取り上げ、上記の音楽科目標に沿った指導の実例を提示する。『浜辺の歌』譜例を取り上げ、授業で教師が行うべき手順、方法の一例を示す。

譜例１　浜辺の歌（中等科音楽教育研究会　2004：90）



① 浜辺の歌は、歌とピアノの音型や強弱記号によって、「波の揺れ」と浜辺をさまよいながら、昔の思い出に浸る「人物の心の動き」が重なり合っていることを表現している。ピアノ伴奏は、上行形と下行形が一対になったなだらかな分散和音と、２小節単位のクレッシェンドとデクレッシェンドによって、「波の満ち干」を象徴している。波の揺れを想像しながら歌い手や

聴衆に情景を描きやすいように、無機質な音の羅列になってしまわないように気を付けて弾き始める。

② 歌い始めはアウフタクト（弱起）なので、自然な流れに乗ってからタイミングよく息を吸って１拍目に重みを置き、はまべの「は」に向かって息をたっぷりと使う。3小節目や4小節目などに4度跳躍する部分があるため、腹筋でしっかりと支えて音程が不安定にならないように保ちながら滑らかに歌う。H音の発音の仕方を指導する。

③ 5小節目の「昔の人ぞ」の部分では、歌がpであるのに対しピアノはmfとなっており、同小節のピアノ右手の分散和音が1オクターブ上に記されている。これは昔の思い出に揺れ動く内面的な「気持ちのゆれ」を、ピアノの音型と強弱記号の変化で表現している。歌は過去に対する思いを馳せるような気持ちで丁寧に歌い、ピアノは1オクターブ音型が上行しているので、目の前で見えている波の動きではなく、過去へと思いを馳せ、心の揺らめきを表現するように音色をパステル調に変化させて、現実と夢の間をいったり来たりするようなグラデーションを表現していく。

④ 7小節目のpは、同小節の「しのばるる」=「過去の出来事や人物を懐かしく思う」といった感傷的な場面や思いを強調させている。単に音を弱くするということではなく、心の中で大切に思い続けて来た気持ちを「しのばるる」に込められるよう、お腹の支えを整えて絞り出すように歌いたいものである。8小節目の6度と5度の跳躍にも気を付けて。

⑤ 二部形式であるこの曲のBの部分は、思いが高まっていく様子を様々な方法で表現している。歌のメロディはこれまでは低音から上行していた形から、高音から下行する形へと変化しているため、歌い出しの音がブレないように、しっかりとブレスをして「かぜのおとよ」と歌い、2度上行し更に高揚させ「くものさまよ」と豊かな響きで歌いたい。ピアノは10～13小節の4小節間に含まれるG4音-G♯4音-A4音（半音階）の上行形と2小節間の大規模なピアノの分散和音、楽曲中において一度のみ提示されるf、4小節間にかかるクレッシェンドとデクレッシェンドが表す「波」の情景的イメージと、過去を懐かしむことでこみ上げてくる「感情の起伏、最高潮に達した感情」といった、心情的イメージを重ね合わせて表現されている。

⑥ 14小節目は次第に穏やかな波に戻る。しかし、心の大きな動きによる余韻が、ピアノの1オクターブ上に時折現れる右手の分散和音や左手の非和声音に表されている。細やかな音の動きや変化を感じて演奏して欲しい。

⑦ 後奏2小節では、全てを包み込むような温かい波や、こみ上げる思いをピアノでやわらかく表現している。右手の6度の重音と左手の幅広い分散和音がレガートになるように注意して、滑らかに演奏すること。

4-3　研究模擬授業を行って

「教職ピアノ実習」では、音楽科の目標を見据えながら、歌唱教材にふさわしい伴奏及び歌唱指導ができるように学生の技術を向上させていくことのほか、実際の教壇に立った時に役立つスキルを身に付けてもらう目的で、前期と後期に1回ずつ研究模擬授業を行っている。

研究模擬授業は「教職ピアノ実習」を履修している学生に対しある特定の歌唱教材を一曲選択し、15分間で歌唱指導を行うというものである。扱う歌唱教材は全て「教職ピアノ実習」で既に習ったものを用い、その中から自分の好きな歌唱教材を選んで発表した。中学生に対する音楽の授業において、新曲を歌えるようにするという設定で研究模擬授業を行った。

行ってみて良かった点、課題・問題と感じた点、学生の感想を以下に記す。

【良かった点】

・授業の展開の仕方が、よく考えられていた。
・歌の情景をよく想像できるような説明で分かりやすかった。
・歌詞を生徒に読ませて、意味を理解させていた。
・『最初に先生が歌うので、ついてきてください。』というアプローチ。
・最初に原曲を聴かせて、生徒にイメージを膨らまさせていた。
・歌詞の意味から思い浮かぶ心情を考えさせ、答えを出さなかった（決めつけなかった）。

【課題・問題点】

・音取りをする前から声部を分けて歌わせてしまった。
・注意を口頭で指摘するだけでなく、歌ってみせる、弾いてみせるなど、実演した方が良かった。
・メロディをピアノで弾いて、聴かせた方が良かった。
・音楽を通してしまわずに、途中で切って細かく指導するべきだった。
・目線を常に生徒へ向けるべきだった。
・40 人に対して授業をしているというイメージがなく、声が小さすぎた。

【学生の感想】

・生徒が飽きてしまわないように歌詞の意味を考えるなど、生徒と一緒にできることが沢山あった。
・演奏面では、ミスをなくしてスムーズに弾けるようにしたい。
・限られた時間の中で何を伝えるべきか、時間配分が難しかった。
・黒板を使ったり生徒の方を見たり、ピアノを弾くだけにならず、じっとしないように心がけたい。
・人前で話すことが苦手なので、改善して大きな声で話せるようにしたい。

研究模擬授業を行って良かったことは、学生が先生役になって授業を行うため、学生の未熟な部分や勉強している様子が伝わってきて刺激になり、先生役、生徒役の学生双方にとって得るものが大きかったことである。普段は講義を受講することの多い学生が逆の立場で授業を行うと、見えなかった部分が沢山見え、授業を行うことの難しさを肌で感じたようである。知識として楽曲を解釈し分析することは誰にでもできるが、それをどのように伝えるのか、生徒に関心を持たせられるように魅力的に伝えるにはどうしたらよいのか、そのような実践的な部分を学んだと思われる。また、40 人の生徒の前で教えるということを想像できずに、生徒役の学生の方を見ずにピアノばかりを見ていたり、声が小さすぎて

後ろまで聴こえなかったり、音楽の専門用語を多用してしまったりして、生徒役の学生が理解できないまま授業を進めてしまう学生も見られた。いつも教壇やピアノの前で音楽指導を行うのではなく、机間巡視をしたり、座らずに立ったまま身体ごと生徒の方へ向けてピアノを弾いてみたり、合唱作品を仕上げる時にはお互いの声が聴きやすいように席を後ろに下げて、椅子のみの配置で座らせたりするなど、席の配置や教師の教室内の立ち位置にも気を配りたいものである。実際の授業ではたえず生徒を見ていることが大切で、良い言葉がけを心がければ授業も引き締まり、楽しい時間となるはずである。一生懸命授業に取り組んでいる生徒のことはあまり目立たず見過ごしてしまうこともあるので、生徒の悪い部分ばかりを指摘するのではなく、良い言動を褒めていきたいものである。そうすることで、結果的にこの指導者についていこうという信頼を生徒から得ることとなり、授業もスムーズに進んでいくからである。音楽の魅力を伝えるために、教員は言葉遣いにも気を配り、夢を与えられるような存在になりたいものである。

5　まとめ

音楽科教員を目指す学生は、多岐にわたる音楽的な知識や技術を身に付け、それを生徒に分かりやすく伝える指導法を学ぶ必要がある。本論文は本学の教職ピアノ実習における、ピアノ演奏技術及び、ピアノ伴奏技術の具体的な向上方法を提示し、歌唱教材を取り上げて実践的な指導法を示すと共に、研究模擬授業を行うことで、実際の指導現場で必要とされる「伝える技術」を身に付けることの重要性を提示した。伴奏指導に偏りがちではあるが、歌唱教材に対する深い理解と解釈、歌い方などの指導も並行して行わなければ、音楽的な指導を行うことはできない。我々教員はあらゆる指導法を研究し、充実した音楽の授業を行うことができる学生を育てていくということに誇りと責任を持って、日々研鑽を続けていくことが大切である。

引用文献

伊藤康英ほか　2017『教職ピアノ実習テキスト My Heartful Songs 2017 年度改訂版』洗足学園音楽大学教職センター

中学校学習指導要領　平成 29 年　第二章　第五節　音楽

中等科音楽教育研究会　2004 『改訂新版　中等科音楽教育法』音楽之友社

参考文献

樹原涼子　2002『プレ・ピアノランド②』音楽之友社